

『エッセー』 1595年版に関する一考察－綴り字の側面から

奥村 真理子

【キーワード】 モンテーニュ、『エッセー』 1595年版、綴り字、書物の製造工程

はじめに

モンテーニュは終生『エッセー』を増補修正し続けた。その最後のテキストは、18世紀に著者直筆の書き込みのある1588年版（ボルドー本）が発見された後も、著者と親交のあったグルネ嬢が彼の死後モンテーニュ夫人の依頼で印刷に付した1595年版のテキストだと信じられていた。しかし、ボルドー本と1595年版のテキストの比較研究が徐々に進み、ついに20世紀初頭、ボルドー本の校訂版¹⁾をStrowskiが出したことによってボルドー本の特権的権威が確立し、1595年版は失墜した。ボルドー本と1595年版のテキストの間に夥しい数の異文の存在を確認したStrowskiは、1595年版の異文の少数についてはモンテーニュがボルドー本に貼り付けたが後に剥がれて失われた紙片に書かれた増補文だろうと推測したものの、ほとんどは誤りか改竄だと断定したのである²⁾。その後20世紀の末まで大方の研究者が、モンテーニュが残した真正な『エッセー』の最後のテキストはボルドー本のテキストであり、1595年版は疑わしい異本であると見做していた。ボルドー本がモンテーニュ自身の肉筆という物証を有すること、ボルドー本にはないグルネ嬢称讃の一節が彼女へのテキスト改竄の疑惑を深めることが、その主たる理由である。

だが20世紀の間1595年版見直しの動きがまったくなかったわけではない。それは、研究者によって多少の違いはあるが、1595年版がボルドー本とは別の、失われたモンテーニュの加筆本に基づいているという説である。すでに19世紀の半ばDezeimerisが、1595年版のボルドー本とのテキストの違いは失われたモンテーニュの加筆本が原因であると論じていた³⁾。20世紀前半にはZeitlinがこの説に基づいて、『エッセー』第1巻の1595年版とボルドー本のテキスト分析から、1595年版の異文はボルドー本より早い時期のモンテーニュ自身のテキストであると結論した⁴⁾。

この説を、現在プラントゥン＝モレトゥス印刷博物館所蔵のアントウェルペン本⁵⁾の発見が発展させた。これはグルネ嬢が1595年版の訂正版（1598年版）のために、誤りの訂正をペンで1595年版に書き込んだ本である。これをAbelが1972年に発見し、グルネ嬢による訂正のリストを翌年発表した⁶⁾。ほぼ同じ時期、アントウェルペン本と他所に残る1595年版の刊本計41冊を調査したSayceは、16世紀には印刷開始後も訂正が行われたことに由来する3冊の刊本間における活字テキストの異同つまり印刷中訂正のリストと、グルネ嬢による手書き訂正のリストを作成し、ボルドー本とは別のモンテーニュのオリジナルテキストを反映したと考えられる訂正と、そうではないと考えられる訂正の2種類に分類した⁷⁾。このSayceのリストと外的状況に基づいてMaskellは

1978年、ボルドー本とは別でそれより後のモンテーニュの最後の原稿 (Copie de Montaigne) が存在したこと、および1595年版が大部分において真正であることを仮説として提示し⁸⁾、次いでこの仮説をボルドー本と1595年版のテキストの比較分析によって論証した⁹⁾。

このように1595年版見直しの動きは若干あったものの、20世紀末まではほぼ一世紀の間、『エッセー』の校訂本はもっぱらボルドー本を底本とし、『エッセー』研究もそれらに準拠していたのである。ところが20世紀の末、1595年版再評価の声が高まった。Simoninは推論を駆使してボルドー本より後の失われた加筆本が存在したこととその形成過程を論証し、従来とは逆にボルドー本のテキストの方を異文とし、モンテーニュの最後のテキストに基づく1595年版を『エッセー』の底本にすべきだと提唱した¹⁰⁾。またDesanは、外的状況、モンテーニュの加筆修正時のボルドー本の物理的状態と余白の書き込みの様態、1595年版の印刷工程の調査等から、ボルドー本より後の印刷に付するための加筆本 (*Exemplar*) が存在したこと、それが1595年版の原稿になった経緯を考証し、当時の印刷の物理的制約を考慮に入れてボルドー本と1595年版と*Exemplar*の三者を往復する未開拓のモンテーニュの最後のテキストの探求が今後必要であると説いた¹¹⁾。そして2001年にはCéardらによって¹²⁾、2007年にはBalsamoらによって¹³⁾、1595年版を底本とする『エッセー』が出版されたのである。

しかし1595年版への疑惑が払拭されたわけではない。Tournonは分節 (句読点とそれに続く語の頭文字の大小) についてボルドー本における活字テキストへの修正と1595年版を調査して、1595年版にはモンテーニュ独特の分節法とそれが文章にもたらすニュアンスの大きな違いが無視されているので、1595年版に対し慎重であるべきだと主張する¹⁴⁾。そして1997年『エッセー』の校訂版¹⁵⁾出版に際しボルドー本の方を底本にし、さらに、失われた書き込み本の説は推測に基づく仮説に過ぎないと繰り返し論じている¹⁶⁾。またBlumは、二つの章 (I, 20とII, 17) に関するグルネ嬢の九つの版の異文の統計から、綴り字・分節・統辞法・語の修正が加え続けられたことを示し、II, 17におけるグルネ嬢称讃の文章の修正を典型的な例として挙げて¹⁷⁾、1595年版だけが例外でなかったとは考え難いとする。Blumはこれに時代背景とグルネ嬢の言動の考察を加えて、彼女は17世紀における『エッセー』批判に対して『エッセー』を守るためにおそらく善意から意図的に修正を施し続けたのだと結論付けた¹⁸⁾。

文学研究においてテキストの問題は根本的問題である。だが、以上概観したように、『エッセー』研究全体に関わる基盤が今大きく揺れている。『エッセー』研究の最重要課題の一つと言えるだろう。

物証がない以上、1595年版のテキストの真正さという問題の決定的な解決は不可能なのかもしれない。それでも、モンテーニュの読者あるいは研究者にとって、モンテーニュの最後のテキストがいかなるものだったのか、という問いは不問に付し難い。たしかにボルドー本と1595年版の

異文の数量は夥しい。もう一つの加筆本がなかったのであればテキストの誤読誤写か改竄だと考えざるを得ない。また、それが存在したとしても（当時の習慣では印刷用原稿は廃棄処分されたので、失われたことがその有力な証拠になり得る）、「グルネ嬢の善意からの意図的な修正」説には頷けるところがある。しかし彼女の1595年版の序文におけるモンテーニュのテキストへの極度の忠実さの証言¹⁹⁾が真っ赤な嘘だとも考え難い。そこで本稿では、綴り字という側面から『エセー』1595年版に関する一つの考察を試みたい。モンテーニュはボルドー本の扉の裏に綴り字に関する指示を記しており、その幾つかは具体例を伴っている。それらの綴り字はボルドー本の活字テキストにおいて、その通りに訂正されている箇所もあれば、訂正されていない箇所もある。綴り字の訂正だけでなく大幅な増補も修正も行っていただけだから訂正漏れは当然起こり得ることだろう。扉の裏の具体的な指示はそれを補うのであって、ボルドー本の個々の箇所とは異なり、一種の指標になっている。これらの指標は、1595年版の編集方針に関する考察の指標にもなるのではないだろうか。無論、1595年版出版のためにバリのグルネ嬢のもとへ送付された原稿がボルドー本より後の増補修正を含んでいたのであれば、綴り字の指示もまたモンテーニュによって変更されていた可能性も考えられるだろう。そうだとすると、「義の娘」が細心なまでの注意と敬意を払って従ったと言う、モンテーニュのテキストが実際に活字にされる際の具体的な作業を窺い知るための指標になるのではないだろうか。

ボルドー本の扉の裏に書かれた具体例を伴う指示は次の5項目である。便宜上項目番号を振って要点だけ記す。[]内は後世の製本時に裁断されたが推定できる文字、〔 〕内は筆者による補足である。

1. monstre, monstreusと区別して、sなしで[mon]tre, montrer, remontrerなどに。
2. c'est, c'estoitと区別して〔cest, cesteではなく〕、sなしでcet, cetteに。
3. ainsiは子音で始まる語の前ではnなし、母音で始まる語の前ではnあり。例えばainsi marcha, ainsin alla。〔この項目は、ainsiは母音で始まる語の前ではnなし、子音で始まる語の前ではnあり、となっているが、指摘されている通り²⁰⁾おそらくモンテーニュの書き間違い。〕
4. campagne, espagneではなく、iを入れて[cam]paigne, espaigne, gascouigneなどに。
5. reigles, reiglerではなくregles, reglerに。

これらのほか、頭文字を大文字にする語は固有名詞だけか少なくとも統一するという指示と、古い綴りに従うようにという指示もあるが、具体例が記されていないので本稿では扱わないことにする。実際、古い綴りとは大体においてロペール・エティエンヌが辞書で採用しているようなものだろうと推測され得るが、それに従えば、項目4はcampaigneだが、1はmonstre、2はcest、3は母音の前でもainsi、5はreiglesの方で²¹⁾、ボルドー本の指示と一致しない。

1595年版の綴り字については、動詞avoirの活用形aと前置詞àの区別、定冠詞laと副詞làの区別、接続詞ouと関係副詞等のoùの区別はほぼ一貫しているが、他に關しては必ずしも綴り字が統一

されていない²²⁾。そのような中で上記の5項目に関する綴り字はどのようになっているのだろうか。

I. 数と割合

1. montre、montrer、remontre と monstre、monstrer

ボルドー本でsなしで表記するよう指示された名詞*montre*および動詞*montrer*の1595年版の『エッセー』のテキストにおける総数は187である（名詞は単数形と複数形、動詞はすべての活用形をカウントした。以下同じ）²³⁾。そのうち、sが入っているものは22で、約12%である。動詞*remontre*の方は総数4で、すべてsが入っていない。ボルドー本の指示と一致する統一の方針があり、ある程度実行されたと考えられる。

2. cet、cette と cest、ceste

cetとcest

総数354のうち、*cet*は338で約95%であるのに対し、*cest*は16で約5%である。ボルドー本の指示と一致する統一の方針があり、かつ、かなりの厳密さをもって統一の方針が実行されたと考えてよいのではないだろうか。

cetteとceste

総数1728のうち、*cette*は1224で約71%（*cett'*および*cet'*を加えると総数1755のうち1251だが、やはり約71%）に対し、*ceste*は504（*cest'*は0）で、総数を1728とした場合も1755とした場合も約29%である。ボルドー本の指示と一致する統一の方針があったように思われるが、方針の実行は*cet*のように徹底できなかったようである。

3. 子音で始まる語の前でainsi、母音で始まる語の前でainsin

総数は468である。そのうちボルドー本の指示と一致しないものは18で、約4%である。ボルドー本の指示と一致する統一の方針があり、かつ、相当厳密にこの方針が実行されたと考えてよいのではないだろうか。

4. campagne、espaigne、gascouigne と campagne、espagne、gascogne

campagneとcampagne

gの前にiを入れた綴り字は2、iなしの綴り字は4である。割合から言えばボルドー本の指示と一致していないことになるが、総数が少ないので方針があったのかどうかを判断できる有意なデータとは言い難い。

espaigneとespagne

*Espaigne*が15、*Hespaigne*が1、*Espagne*が4である。これに関しても総数が少ないので有意な数値とは言い難いが、ボルドー本の指示と一致する方針があり、あまり徹底できなかったもののある程度は実行されたのかもしれない。

gascouigneとgascogne

gascouigneは0、gascogneも0で、Gascongneが6である。campaigne、campagneと同様、総数が僅かなので有意なデータとは言い難いが、ボルドー本の指示と一致しない方針があったのかもしれない。

5. regles、regler と reigles、reigler

名詞と動詞の総数は225で、iが入っていない綴り字は170で76%、iを入れた綴り字は55で24%である。ボルドー本の指示と一致する統一の方針があったようだ。またその方針はある程度実行されたように思われる。

以上のそれぞれの綴り字の数と割合から、総数が極めて少ない4のcampaigne/campagneとgascouigne/gascogne/gascongneは別として、程度の違いはあれ綴り字統一への指示と配慮が1595年版でなされていたように思われる。方針は、1から3と、4のespaigne、および5についてはボルドー本の指示と一致していると考えてよいだろう。4のcampagneとgascongneに関して方針があったとすれば、編者が「指示」を無視して恣意的に変えたのだろうか。ボルドー本の扉の裏ページの「指示」は、場所によってインクの色にもペンの太さにもモンテーニュの書体にも違いがある²⁴⁾ことから、一度に書かれたのではなく、何度にもわたって書かれたと推定される²⁵⁾。したがって始めの方と終わりの方では時間的な隔たりがあったと推測できる。別の加筆本が存在し、かつボルドー本より後のものであったのならば、始めに記されている項目1から4のうち4の一部はモンテーニュ自身が方針を変えて別の指示を出していたのだろうか。4のgascouigneはすべてgascongneになっているのでいろいろと推測したくなるが、総数が少なすぎるのだからやはり控えたい。

II. 分 布

i. 巻別の数と割合

次に、それぞれの綴り字の数と割合を巻別に見てみよう。

1. montre、montrer、remontre と monstre、monstrer

remontreはすべてsなしの綴り字なので割合を記す必要はないだろう。ちなみに各巻における数は、第1巻は2、第2巻は1、第3巻は1である。

montre、montrer と monstre、monstrer

第1巻は50 (89%) 対6 (11%)、第2巻は52 (83%) 対11 (17%)、第3巻は63 (93%) 対5 (7%) である。第1巻と第3巻に比べ、第2巻が不統一の度合いが少し高い。

2. cet、cette と cest、ceste

cet と cest

第1巻は99 (98%) 対2 (2%)、第2巻は136 (95%) 対7 (5%)、第3巻は103 (94%) 対7 (6%) である。大きな差はないが、第1巻が統一の度合いがより高い。

cette と ceste

第1巻は421 (98%) 対10 (2%)、第2巻は407 (52%) 対383 (48%)、第3巻は396 (78%) 対111 (22%) である。第1巻の統一度が特に高いのに対し、第2巻と第3巻は不統一の度合いが高く、特に第2巻の不統一が顕著である。

3. 子音で始まる語の前でainsi、母音で始まる語の前でainsin

この指示に合致するものとしめないものは、第1巻は123 (96.9%) 対4 (3.1%)、第2巻は191 (95.5%) 対9 (4.5%)、第3巻は136 (96.5%) 対5 (3.5%) である。僅差なのでこの項目に限りパーセンテージを10分の1位まで示した。強いて言えば、第1巻、第3巻、第2巻の順で統一度が高いが、すべての巻で同様にかなり統一されていると言えよう。

4. campagne、espaigne、gascouigne と campagne、espagne、gascogne

campaigne と campagne

これらは総数が僅少のため比率は考慮に値しないから数だけ示すと、第1巻は1対1、第2巻は1対2、第3巻は0対1である。巻別の特徴を表すような数値とは言えない。

espaigne と espagne

第1巻はEspaigne 10 対 Espagne 0、第2巻はEspaigne 4 対 Hespaigne 1 対 Espagne 4、第3巻はEspaigne 1 対 Espagne 0 である。総数が少ないが、第1巻は統一されているのに対し、第2巻は不統一だと言える。第3巻は総数が1なので何とも言えない。

gascouigne と gascogne

すべてGascongneで、各巻における数は、第1巻は3、第2巻は1、第3巻は2である。

5. regles、regler と reigles、reigler

第1巻は56 (84%) 対11 (16%)、第2巻は73 (84%) 対14 (16%)、第3巻は41 (58%) 対30 (42%) である。第1巻と第2巻は同様にある程度統一されているのに対し、第3巻は不統一の度合いが高い。

項目によって違いはあるが、概して言えば、第1巻は綴り字が比較的良好に統一されているのに対し、第2巻と第3巻は統一の程度が劣っているようである。第1巻は綴り字統一の指示もしくは校正が全般的にある程度よく行き届いていたが、第2巻と第3巻は行き届かないものがあったのではないだろうか。

ii. *cette*と*ceste*の分布

総数の多い*cette*と*ceste*についてページ別に分布を調べてみると興味深い現象が認められる。第1巻は*cette*が支配的な中に*ceste*が散在しているのに、第2巻は、若干の例外はあるものの、全巻にわたって主として12ページの周期で*cette*と*ceste*が交替している。第3巻は、始めの6割（138ページまで）は第1巻と同様、*cette*が支配的な中に*ceste*が散在している。これに対し第3巻の終わりの4割（139ページから終わりまで）は、第2巻と同様、若干の例外はあるが*cette*と*ceste*の周期的交替が認められ、周期は主として第2巻と同じく12ページで、部分的に6ページ周期と4ページ周期になっている。このような分布の違いに従って*cette*と*ceste*の数と割合を取り直して比較すると、第1巻の421（98%）対10（2%）と、第3巻の始めの6割における289（99%）対3（1%）がほぼ同じ割合であり、他方、第2巻の407（52%）対383（48%）と、第3巻の終わりの4割における107（50%）対108（50%）がほぼ同じ割合になっている。

第1巻全体と第3巻の始めの6割については指示もしくは校正がかなり行き届いていたという解釈ができるかもしれないが、第2巻全体と第3巻の終わりの4割に見られる周期性については、指示もしくは校正の不行き届きだけでは説明がつかない。

Ⅲ. 製造工程との関連

この現象と当時の書物の製造工程を照らし合わせると、因果関係が見出される。

i. 判型、折丁と植字法

1595年版の判型は二つ折り判である。折丁は挟み込みの折丁（*cahiers encartés*）で、原則的に1折丁は3枚からなっているが、これは、全紙1枚の1折丁では折丁に厚みのない二つ折り本や四つ折り本に堅牢性をもたせる目的で一般的によく行われたことである²⁶⁾。

16世紀、活字は非常に高価で、二揃いの活字が印刷機3台分に相当したとか、ある小規模印刷工房が所有していた活字は決して良い状態のものではなかったのに、その総額はその工房の印刷機2台の4倍以上の額に見積もられたという記録がある²⁷⁾。このように高価な割には活字一揃いで植字できる量は少なく、例えばキケロ（シセロ）一揃いで全紙1.5枚、すなわち二つ折り判で6ページ分しかできなかつた²⁸⁾。したがって、植字が済んで組付けされた組版は、初校（ゲラ刷り）、校正、植字の訂正、二校、植字の訂正、印刷という工程が済むと直ちに解版され、活字を次の組版に再利用しなければならなかつた。特に二つ折り判の挟み込み折丁の場合、多くの活字が必要になるので、植字はページ順ではなく組版順（*composition «par formes»*）にされることが多かつた。1組版（紙の片面）だけ組み付けては次の工程に廻すことで、印刷と解版の回転を速くし、活字の再利用も速やかにできるようにしたのである。しかし、例えば二つ折り判で挟み込みの3枚折丁の場合、折丁の1ページ目と12ページ目が同じ組版、2ページ目と11ページ目

が同じ組版、という具合なので、植字の順序はページ順と違って複雑になる。このような複雑さにもかかわらず、植字の前段階で行われる組付け見積もりが組版順植字を可能にしていた。植字工は、組付け見積もりの際印刷用原稿に付けられた行区切りとページ区切りの印に従って作業したのである。15～16世紀にはこの組版順植字法がよく用いられたという。だが、組付け見積もりが不正確だったとき調整が必要になる。とりわけ印刷用原稿が散文の手稿の場合、組付け見積もりが難しいので不正確になることが多かったようだ。そのとき植字工は、略語や省略綴字の使用、字間・語間・行間の加減、行数の増減、時にはテキストの僅かな変更など、さまざまな手段を使って調整した。だから逆に、略語や省略綴字の使い方、字間・語間・行間、行数の不規則性がページによってあれば、その書物は組版順に植字されたことが分かる。さらに、傷などによって特定できる活字が同じ挟み込み折丁に繰り返し使われていればページ順植字ではあり得ないことが分かるという²⁹⁾。

二つ折り判で挟み込みの折丁である1595年版には、略語や省略綴字が極端に多く使用されていたり、字間・語間・行間が不規則だったり、1ページ当たりの行数が原則の44行よりも少なかったり多かったりするページが数々ある。第2巻の289ページや291ページに至っては、韻文の引用が不恰好な2段組になっている。すでに指摘されている通り³⁰⁾、1595年版は組版順に植字されたと考えてよいだろう。

ii. 植字工たちの分担

ところで組版順植字には、印刷と解版の回転を速くし、活字の再利用を速やかにできること以外にも、複数の植字工が同時に同じ組版を植字できるという利点があった。これによってさらにスピードを上げられたのである。プランタンの印刷工房では、二人の植字工が分担して、全紙(例えば全紙NとO)の半分を一人が、同じ全紙(NとO)のもう半分をもう一人が担当して同時に植字した記録が残っているという³¹⁾。1595年版に見られるcetteとcesteの周期的交替は、これと同様の複数の植字工による組版順植字に起因していると思われる。

例として折丁2Sと2Tにおけるcetteとcesteの周期的交替を組版に従って示すと次ページの図のようになる。分かりやすくするために綴り字cesteがあるページに網掛けをした。このように、ある折丁の外面の組版(forme extérieure)では、右側のページはcesteが支配的、左側のページはcetteが支配的で、内面の組版(forme intérieure)ではその逆になっていて、次の折丁では前の折丁の正反対になっているのである。このような現象が、若干の例外はあるものの、第2巻では全体に、第3巻では終わりの4割に見出されるのである。これは、おそらく担当した二人の植字工それぞれの恣意性に起因すると考えてよいのではないだろうか。すなわち、ある折丁の外面の組版では、右側のページは言わばceste派の植字工が、左側のページはcette派の植字工が担当し、内面の組版では分担がその逆で、次の折丁では分担が前の折丁の正反対だったのではないだ

【図】

<i>formes extérieures</i>		<i>formes intérieures</i>	
492 cette 0 ceste 0 2S6v ^o	481 cette 0 ceste 3 2S1r ^o	482 cette 0 ceste 5 2S1v ^o	491 cette 2 ceste 0 2S6r ^o
490 cette 6 ceste 0 2S5v ^o	483 cette 0 ceste 3 2S2r ^o	484 cette 0 ceste 2 2S2v ^o	489 cette 2 ceste 0 2S5r ^o
488 cette 2 ceste 0 2S4v ^o	485 cette 0 ceste 5 2S3r ^o	486 cette 0 ceste 4 2S3v ^o	487 cette 2 ceste 0 2S4r ^o
504 cette 0 ceste 5 2T6v ^o	493 cette 5 ceste 0 2T1r ^o	494 cette 3 ceste 0 2T1v ^o	503 cette 0 ceste 1 2T6r ^o
502 cette 0 ceste 1 2T5v ^o	495 cette 3 ceste 0 2T2r ^o	496 cette 1 ceste 0 2T2v ^o	501 cette 0 ceste 3 2T5r ^o
500 cette 0 ceste 3 2T4v ^o	497 cette 0 ceste 0 2T3r ^o	498 cette 1 ceste 0 2T3v ^o	499 cette 0 ceste 4 2T4r ^o

ろうか。そのため原則的な3枚折丁ではcetteとcesteの交替が12ページ周期で起こっているのである（第2巻と第3巻の最後の2枚折丁2X、3Tと3V（3Tと同じ分担形態）では4ページ周期）。

なお、周期の変則は第2巻には2ヶ所ある。一つはS4r°（p. 211）で、ここは周期通りでは言わばceste派のページになるはずだがcetteが2回でcesteが0回である。これは同じ組版の左側のページS3v°（p. 210）が第1巻の最終ページの次でブランクなので、左側を担当するはずだったcette派の植字工が右側のS4r°を担当したと考えられる。これと同じ折丁のS6v°（p. 216）はcetteが1回、cesteが0回なので一見変則的に見えるが、同じページにcestuy-cyが2回あり、cestuy-cyはほとんどの場合cesteのページに見出されることから、このcetteは多分校正段階の訂正か何かが原因で生じたもので、周期通り主としてceste派の植字工が担当したと見做すことができる。もう一つの変則は、折丁2Gの一番外側の全紙の外面の2G6v°（p. 360）と、内面の2G6r°（p. 359）で、なぜなのか理由は分からないが何らかの事情があったのだろう、同じ折丁の内側の2枚とは逆にすべてcetteになっている（2G1r°（p. 349）もcetteだけで、2G1v°（p. 350）はcetteもcesteもない）。第3巻の周期の変則は1ヶ所で、3O4r°（p. 163）から3P3v°（p. 174）までは原則的周期ではcesteになるはずなのに、ここも何らかの事情があったのだろう、cetteへの交替が6ページ目の3P1r°（p. 169）で起こり、6ページ後の3P4r°（p. 175）からcesteに交替している。また、例外的にcetteとcesteが入り混じっているページは、第2巻に10ページ、第3巻の終わりの4割に3ページあるが、これらは校正段階での植字の部分的な組み直しの際に生じたのかもしれない。

このような若干の変則と混在はあるものの、プランタンの工房で行われていたような二人の植字工による分担が1595年版でも行われ、原則的に上に述べたような分担で二人の植字工が組版の左右を担当した組版順植字だったと考えれば、第2巻全体と第3巻の終わりの4割に見出されるcetteとcesteの周期的交替という一見奇妙な現象が理解できる。また、それらにおいてcetteとcesteの割合がほぼ同様に半々であることも納得できるのである。このような複数の植字工の分担による組版順植字法の採用から、業者が仕上げをかなり急いでいたことが窺われる。

iii. 2チームの同時進行印刷、出版の背景、製造の状況

1595年版は、第1巻と第2巻は折丁付けもページ付けも連続しているのに、第3巻は、第2巻の最後の折丁が2Xで、2Yと2Zが残っているにもかかわらず、3Aから始まり、ページ付けも1から振りなおされていること、および第3巻は第1巻と第2巻に比べて出来が明らかに劣っており、活字も異なっていることから、第3巻は第1巻・第2巻とは別のチームが作業したことが推定されている³²⁾。複数のチームによる同時進行印刷もまた当時行われていたことが確認されている³³⁾。急がなければならないときや大部の作品のとき、あるいは部数が多いときなどに行われたという。1595年版の場合いづれにも当てはまるように思われる。『エッセー』は大幅に増補され

て膨大なテキストになっていたのだし、部数も1588年版と同じぐらい多かったという³⁴⁾。そればかりでなく緊急性も高かったようだ。

1595年版は1593年にリヨンで出版された『エセー』の偽版³⁵⁾へのアベル・ランジュリエ書店の対抗措置という色合いが濃い。ランジュリエは1593年、『エセー』を含む偽版を告発する文書をパリ高等法院に提出し³⁶⁾、1588年版の在庫³⁷⁾も特認の期限³⁸⁾もまだ残っていたのに、新たに1594年10月15日付けの特認を得て、この新版を、とりわけ1590年代のランジュリエには例外的な、費用のかかる二つ折り判で出したのである³⁹⁾。しかも、主たる出版者はランジュリエだったようだが、ソニウスとの共同出版になっている。費用の負担を軽くするためだったらしい⁴⁰⁾。また、1594年10月28日には700トゥール・リーヴルの借金をしているが、『エセー』の出版費用を工面するためだったのではないかと推測されている⁴¹⁾。費用がかかっても二つ折り判という愛蔵版的な判型にすることで1595年版の権威付けをし、携帯版的な八つ折判の偽版との差別化を図ったのではないだろうか。しかもこの対抗措置はかなり急いでとられたようである。1595年版は1594年の暮までに印刷を終了して出版されたという説がある⁴²⁾。出版年が1595年になっているのは、年末に出版される本の出版年を翌年のものにするという当時の習慣に従ったものだと考えることができるようだが、いずれにせよ1594年の年末か1595年の初めには出版されたと推定されている⁴³⁾。グルネ嬢が1595年版の序文の中で「1594年に印刷を終了した」と述べていること⁴⁴⁾と照らし合わせれば、年内に印刷は終えられたと考えてよいのではないだろうか。また、グルネ嬢は「大幅に増補された『エセー』を印刷させることに昨年の夏を費やしました」とリプシウス宛の手紙に書いている⁴⁵⁾。夏に本文を印刷し、秋から、グルネ嬢が印刷された本文全体を印刷用原稿と照合して正誤表を作成するとともに、1595年版の序文で読者に告げている通り印刷されたページに訂正をペンで書き込み、工房の方は通常本文の後に植字・印刷される扉・允許状・序文・目次と、「読者へ」に取り掛かったとすれば（事実、扉から「読者へ」までは本文と別の折丁付けになっている）、印刷がすべて終了する頃には年末が近づいていたと考えることができる。

だが、印刷に付された原稿は大部の作品であるばかりか、夥しい修正を施された既刊本の活字テキストと大量の増補文の手稿が入り混じっている。そのような原稿をもとに、大判の二つ折り判で、本文だけで組版378の植字・印刷をひと夏の間に仕上げることができるのだろうか。当時の植字の作業能率は、専門家でも史料が稀でよく分からないらしい。16世紀半ば、活字の種類と仕事の難易度によるが日に1～3組版を仕上げるよう親方たちが提案したという⁴⁶⁾。これは親方たちの提案なのだから、植字工たちにとっては厳しい分量だったことだろう。また、時代が少し下るが17世紀半ば、最大値として解釈されるべき数値で、校正の規模に大きく影響されるらしいが、パリ高等法院が、ローマン体でごく小さい活字の場合1日に1組版の3分の1から2分の1、小さい活字の場合1組版の3分の2、中くらいの活字の、キケロ〔11～12ポイント〕は1組版、オーギュスタン〔12～13ポイント〕は1.5組版、16ポイント以上の大きな活字では2組版

に定めたという⁴⁷⁾。これによれば中くらいの活字（18世紀まで活字フェイスのサイズには統一的単位も基準もなかった⁴⁸⁾）ので曖昧だが、およそ12ポイントか13ポイント）の1595年版『エセー』に必要な作業日数は、1日1組版のペースだと378日、1.5組版のペースだと252日になる。ひと夏では到底無理である。だが、2チーム同時進行で各チーム植字工2人の分担にすれば、第1巻と第2巻は合計262組版だから、作業日数は1人当たり1日1組版のペースでは131日、1.5組版のペースでは87日になる。最大値的なかなり大急ぎの1.5組版のペースなら、休日を考慮に入れても何とか秋頃までに本文を仕上げるができるようだ。もっとも、この計算は仮説的なものであり、各チーム植字工2人の分担が行われたのが最初からだったのか途中からだったのかを証明することは困難だが、仮に最初は言わばcette派の植字工だけがそれぞれのチームの植字を担当し、途中からceste派の植字工がそれぞれのチームに加わったのだとしたら、第1巻の全体と第3巻の始めの6割に散在するcesteの説明がつかない。それらの中に1588年版の活字テキストでcetteだったものが含まれているから、原稿の綴り字に原因を帰することもできない。前年に出た偽版への対抗措置を早急に行うためにランジュリエが相当急がせて、初めから各チーム植字工2人の分担が行われたのではないだろうか。第1巻の全体と第3巻の始めの6割はcesteが稀なのは、印刷期間の前期と後期では校正の厳密さが異なったことが考えられる。先に考察した綴り字に関する他の項目でも、cetとainsiまたはainsinは終始かなり厳密な校正の対象だったと思われるが、その他は概して印刷期間の後半に相当する部分の方で統一の度合いが低い傾向がある。前半は綴り字にも気配りがなされていたが、後半は、おそらくペースを上げなければならなかったせいで、語によっては綴り字への配慮を行き届かせることが困難になり、cetteへの統一は失念されたか、やむを得ず譲歩または断念されてしまったと考えられる。

終わりに

「読者へ」の原稿が行方不明になるという有名なアクシデントのほかに、1595年版の植字・印刷には数々の不注意なミスが生じた模様である。第1巻第22章（ボルドー本では第23章）「習慣について…」の最後の部分の大幅な脱落を補うために後から組版の植字を全体的にやり直した差し替えのカルトン（キャンセル・シート）（pp. 63-64とpp. 69-70）が一部の刊本に挿入されているのも、現存する多くの刊本には先に作ったと思われる正誤表が、一部の刊本には後から項目を追加したと思われる正誤表が見出されるのも、大部分の刊本に訂正がペンで書き込まれているのも、グルネ嬢の熱心な努力の証しであると同時に、裏返せば、それほど急いで作業が進められたことを表しているのではないだろうか。16世紀の著者たちは印刷された著書に誤りが多いことをしばしば嘆き、植字工の不注意、内容が変わるようなテキストの変更を勝手にする工房の校正係の恣意性と僭越さとともに、工房が作業を急いで著者には十分な校正の時間を与えられなかったこと、さらには印刷中しか校正および訂正の機会を与えられなかったことを訴えている⁴⁹⁾。本稿

における考察によって、1595年版『エセー』の植字・印刷は決して時間的に余裕のあるものではなかったことが窺われ、この書物の製造もそれと似たような状況で行われ、後期はそれがいっそう甚だしくなったと思われる。そのような制約の中、グルネ嬢はテキストの内容に関わる誤りを探して訂正することを優先し、綴り字に関しては、正書法が印刷監督や植字工の思いつきないし恣意性に委ねられ、ロベール・エティエンヌの辞書が「綴り字参考書」として出版業界の賛同を得ていた時代⁵⁰⁾に、「綴り字参考書」とは必ずしも一致しない方針のもとに統一を図るべく指示を行き届かせようと努力したものの、見落とししたり、失念したり、「正誤表がなくてもおのずから分かるほど些細な間違い」⁵¹⁾については譲歩もしくは断念せざるを得なかった点があったのではないだろうか。

さて、綴り字よりも重大な問題がある。すでに触れたように、組版順植字で組付け見積もりが不正確で大幅な調整が必要になった場合に時には植字工がテキストを少し変えることさえあったり、技術的な調整の必要性ゆえなのかそれとは関わりがないのか、工房の校正係が恣意的にテキストを変更することまであったという。そのようなことが1595年版『エセー』の印刷過程で行われたとしたら、また、グルネ嬢が1595年版の誤りを訂正すべく入念に準備したのに1598年版の印刷過程で行われたとしたら、1595年版と1598年版のテキストの異同⁵²⁾の中には、それらのいずれかに起因するものが含まれている可能性があることになる。逆に、1598年版にはアントウェルペン本を始め1595年版の刊本に見られるグルネ嬢による訂正の4分の3しか反映されていない⁵³⁾。それが書店の要請だったのか否か分からないが、年を経るごとに『エセー』の編集・編纂方針への書店の介入は強くなり、グルネ嬢は譲歩を強いられ、現場に関与できなくなっていったようである⁵⁴⁾。1595年版『エセー』のテキストの真正さという問題の鍵はグルネ嬢の誠実さであるが、その実現に書物の印刷工程と工房および書店の事情が影響を及ぼしたことが本稿における考察によって確認された。ボルドー本と1595年版のテキストの違いのみならず、1595年版と1598年版のテキストの違いに関する調査と考察が、書物の印刷工程と工房および書店の事情という側面を考慮に入れてなされる必要があるのではないだろうか。

註

- 1) *Les Essais de Michel de Montaigne*, publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat Strowski, 5 vol., Bordeaux, Pech, 1906-1933 [réimpr., Georg Olms, 1981].
- 2) *Ibid.*, I, pp. 461-464.
- 3) Reinhold Dezeimeris, *Recherches sur la recension du texte posthume des Essais de Montaigne*, Bordeaux, Gounouilh, 1866.
- 4) Jacob Zeitlin, «The Relation of the Text of 1595 to that of the Bordeaux Copy», *The Essays of Michel de Montaigne*, I, New York, Knopf, 1934, pp. 421-434. (もっともこの論はArmaingaud版

- に部分的に収録された不正確なテキストに準拠した点で大きな欠陥がある。)
- 5) プランタン＝モレトゥス印刷博物館には2冊所蔵されており、区別するために「アントウェルペン本1」、「アントウェルペン本2」と呼ばれることもある。一般に「アントウェルペン本」と言う場合、書き込み訂正の多い「アントウェルペン本1」の方を指す。
 - 6) Günter Abel, «Juste Lipse et Marie de Gournay. Autour de l'*Exemplaire d'Anvers des Essais de Montaigne*», *BHR*, 35, 1973, pp. 117-129.
 - 7) Richard A. Sayce, «L'édition des *Essais* de Montaigne de 1595 », *BHR*, 36, 1974, pp. 115-141.
 - 8) David Maskell, «Quel est le dernier état authentique des *Essais* de Montaigne? », *BHR*, 40, 1978, pp. 85-103.
 - 9) *Id.*, «Montaigne correcteur de l'exemplaire de Bordeaux », *BSAM*, 25-26, 1978, pp. 57-71.
 - 10) Michel Simonin, «Aux origines de l'édition de 1595», *Montaigne et Marie de Gournay*, Actes du Colloque international de Duke 31 mars-1^{er} avril 1995 réunis et présentés par Marcel Tetel, Champion, 1997, pp. 7-51.
 - 11) Philippe Desan, *Montaigne dans tous ses états*, Fasano, Schena Editore, 2001, pp. 69-120.
 - 12) Montaigne, *Les Essais*, édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin, sous la direction de Jean Céard, Le Livre de Poche, «La Pochothèque», 2001.
 - 13) Montaigne, *Les Essais*, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2007.
 - 14) André Tournon, «Le “bon ange” et le bon usage : Montaigne au purgatoire», *Marie de Gournay et l'édition de 1595 des Essais de Montaigne*, Actes du Colloque organisé par la Société Internationale des Amis de Montaigne les 9 et 10 juin 1995, en Sorbonne, réunis par J.-C. Arnould, Champion, 1996, pp. 39-53.
 - 15) *Essais de Michel de Montaigne*, présentation, établissement du texte, apparat critique et notes par André Tournon, 3 vol., Imprimerie nationale, 1998.
 - 16) Tournon, «L'exemplaire et la copie», *BSAM*, 13-14, 1999, pp. 71-77, etc.
 - 17) もっとも、グルネ嬢自身が、この一節に限り大きな修正を行ったと1625年版と1635年版の序文に記しており、実際この2版でそうなので、この例はいささか偏った判断材料のように思われるのだが。
 - 18) Claude Blum, «Les principes et la pratique : Marie de Gournay éditrice des *Essais*», *Marie de Gournay et l'édition de 1595 des Essais de Montaigne*, pp. 25-37.
 - 19) «Au reste j'ay secondé ses intentions* jusques à l'extreme superstition» (*Préface sur les Essais de Michel seigneur de Montaigne, par sa Fille d'Alliance*, Montaigne, *Les Essais*, 2007, p. 24 [以下 *Préface 1595*と略記] [* inventionsの誤植])。

- 20) *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. Strowski, I, p. 427, note 3 ; *Essais de Michel de Montaigne*, éd. Tournon, p. 663, note.
- 21) Robert Estienne, *Dictionnaire françois-latin (1549)*, Genève, Slatkine Reprints, 1972.
- 22) Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, «Note sur la présente édition», Montaigne, *Les Essais*, 2007, p. XCV.
- 23) *Le Corpus Montaigne*, édité par Claude Blum, H. Champion/Bibliopolis S.A., 1998で検索した。以下同じ。
- 24) カラーのファクシミリ版 *Reproduction en quadrichromie de l'exemplaire avec notes manuscrites marginales des Essais de Montaigne (Exemplaire de Bordeaux)*, édition établie et présentée avec une introduction par Philippe Desan, Fasano-Chicago, Schena Editore-Montaigne Studies, 2002を見るとよく分かる。
- 25) Strowski, *op. cit.*, I, p. 428.
- 26) Lucien Febvre et Henri-Jean Martin, *L'apparition du livre*, Albin Michel, «L'Evolution de l'Humanité», 1971, p. 100 (リュシアン・フェーヴル、アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現』、関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳、筑摩書房、1985) ; Jeanne Veyrin-Forrer, Fabriquer un livre au XVI^e siècle, in *Histoire de l'édition française*, sous la direction générale de Henri-Jean Martin et Roger Chartier, Tome I, Promodis, 1982, p. 287.
- 27) *Ibid.*, p. 279.
- 28) *Ibid.*
- 29) *Ibid.*, p. 289.
- 30) Desan, *op. cit.*, pp. 99-101.
- 31) Veyrin-Forrer, *op. cit.*, p. 289.
- 32) Sayce, *op. cit.*, p. 118 ; R. A. Sayce and David Maskell, *A descriptive Bibliography of Montaigne's Essais, 1580-1700*, London, The Bibliographical Society, 1983, p. 28 ; Jean Balsamo et Michel Simonin, *Abel L'Angelier et Françoise de Louvain (1574-1620)*, Genève, Droz, 2002, p. 266.
- 33) Veyrin-Forrer, *op. cit.*, pp. 299-300.
- 34) Balsamo et Simonin, *op. cit.*, p. 87.
- 35) Sayce and Maskell, *op. cit.*, pp. 18-20.
- 36) Balsamo et Simonin, *op. cit.*, pp. 455-457.
- 37) *Ibid.*, p. 85.
- 38) 1588年6月4日から9年間。つまり1597年まで。
- 39) *Ibid.*, p. 112.
- 40) Sayce, *op. cit.*, p. 116.

- 41) Balsamo et Simonin, *op. cit.*, p. 458 ; Montaigne, *Les Essais*, 2007, p. LXXXIX.
- 42) Paul Bonnefon, *Montaigne et ses amis. La Boétie, Charron, Mlle de Gournay*, A. Colin, 1898, II, p. 200.
- 43) Sayce, *op. cit.*, p. 119.
- 44) *Préface 1595*, p. 24.
- 45) «J'employai l'esté dernier à faire imprimer les *Essais* fort amplifiés » (Lettre de Marie de Gournay à Juste Lipse (2 mai 1596), Marie de Gournay, *Œuvres complètes*, édition critique par Jean-Claude Arnould, Evelyne Berriot, Claude Blum, Anna Lia Franchetti, Marie-Claire Thomine et Valerie Worth-Stylianou, sous la direction de Jean-Claude Arnould, tome II, H. Champion, 2002, p. 1938)。この書簡の年代は1596年ではなく1595年だという説がある (Sayce, *op. cit.*, p. 130)。たしかに、この書簡中の「1年前に印刷させた小冊子の中で2、3度あなたのお名前を挙げました」、「初版は〔義の父モンテーニュを〕失ったばかりで印刷への目配りに精神を集中することができなかつたせいで酷い代物だからお送りしませんでした」という文言はMarie Le Jars de Gournay, *Le Proumenoir de Monsieur de Montaigne*, Abel L'Angelier, 1594のことを指し、「もうすぐその本の第2版をお手元に届けます」という言葉は1595年に出版された*Le Proumenoir...*の第2版のことであろうから、書簡の年代は1595年だと考えてよいのではないだろうか。
- 46) Febvre et Martin, *op. cit.*, p. 196.
- 47) Veyrin-Forrer, *op. cit.*, p. 292.
- 48) Febvre et Martin, *op. cit.*, p. 86.
- 49) Veyrin-Forrer, *op. cit.*, p. 292 ; Febvre et Martin, *op. cit.*, p. 85.
- 50) *Ibid.*, pp. 449-450.
- 51) *Préface 1595*, p. 25.
- 52) I, 20とII, 17に関する1595年版を基準とした1635年版までのいわゆるグルネ嬢版各版の異文には、綴り字の異文 (平均55%)、句読点とそれに続く語の頭文字の大小の異文 (平均40%)のほか、広義での統辞論的異文が平均2%、語彙の異文が平均3%あるという (Blum, *op. cit.*, p. 31)。
- 53) Maskell, «Quel est le dernier état...», p. 101.
- 54) Jean Balsamo, «Abel L'Angelier et ses Dames : les Dames des Roches, Madeleine de L'Aubespine, Marie Le Gendre, Marie de Gournay », *Des Femmes et des livres*, actes de la journée d'étude, *Etudes et rencontres de l'Ecole des chartes*, 4, Ecole des chartes, 1999, pp. 135-136.

L'édition de 1595 des *Essais* et son orthographe

Mariko OKUMURA

La première édition posthume des *Essais* publiée en 1595 présente de nombreuses différences avec l'Exemplaire de Bordeaux (EB) corrigé et augmenté de la main de Montaigne. Doit-on pour autant douter de l'authenticité du texte de cette édition? Il est difficile de trancher la question de manière définitive, car nous ne disposons plus de la copie que Marie de Gournay, éditrice, a reçue de Madame de Montaigne. Cet article a pour objet d'éclaircir le principe et la pratique de l'éditrice à partir de l'examen de l'orthographe de cette édition. Sur le verso du titre d'EB, Montaigne indique ses recommandations sur l'orthographe en citant quelques mots : *montre*, *montrer* et *remontre* ; *cet* et *cette* ; *ainsi* avant un élément consonantique initial et *ainsin* avant un élément vocalique initial ; *campaigne*, *espaigne* et *gascouigne* ; *regle* et *regler*. Au vu du recensement des formes de ces mots, il apparaît que la plupart ont été composés selon le principe d'uniformisation de l'orthographe conforme aux recommandations d'EB, que les uns sont uniformisés totalement ou à peu près et les autres jusqu'à un certain point. En général, l'uniformisation est mieux respectée dans le livre I. En outre, la répartition des formes *cette* et *ceste* est remarquable : la forme *cette* domine dans le livre I et les premières pages (60%) du livre III, tandis que les formes *cette* et *ceste*, à quelques exceptions près, apparaissent alternativement dans le livre II et les dernières pages (40%) du livre III. Cette alternance témoigne du travail simultané de deux typographes sur les mêmes feuilles que permet la composition «par formes», employée notamment pour les cahiers encartés in-folio comme l'édition de 1595. On sait par ailleurs que deux équipes ont travaillé simultanément sur deux presses, l'une pour les deux premiers livres, l'autre pour le troisième. Ces procédés étant adoptés en vue d'une réalisation rapide, on peut en déduire que l'édition de 1595 a été imprimée de toute urgence, probablement sur ordre du libraire qui aurait voulu ainsi répondre sans délai à la contrefaçon des *Essais* publiée en 1593. Malgré cette précipitation, l'éditrice s'est efforcée de corriger les erreurs. Néanmoins, une cadence davantage accélérée dans la dernière moitié du travail aidant, plusieurs erreurs auraient échappé à son attention ou elle aurait été obligée de renoncer à la correction de «quelques si légères fautes» qui «se restituent elles-mêmes» (*Préface 1595*). Or au XVI^e siècle, non seulement négligence et précipitation sont responsables de fautes typographiques, mais il arrive parfois que le compositeur modifie légèrement le texte quand le calibrage a été inexact, ou encore que le correcteur de

l'atelier l'altère de son propre chef. Les variantes entre EB, l'édition de 1595 et la deuxième édition corrigée de 1598 doivent donc être examinées sous tous leurs aspects, sans faire abstraction des circonstances auxquelles l'imprimeur et le libraire ont dû se plier.